

# 帝國農會昭和十四年度稻作勞働狀況

## 調査の結果發表

帝國農會は昭和十四年度の稻作勞働の狀況の調査を稻作農家八三一戸について行つたが、其の結果は次の如くである。

### 昭和十四年稻作勞働の狀況

稻作農家八三一戸について調査した結果によれば昨年における稻作反當勞働日數は自作者二〇・二日、小作者一九・〇日である。小作者は自作者に比して反當勞

働日數一・二日程少く幾分粗放化の傾向が見られる。而して之を昭和十三年と比較すれば自作者にあつては一・一日、割合に於て五・八%、小作者にあつては〇・六日、割合に於て三・二%の増である。之を作業別に見れば自作者に於ては殊に除草、病蟲害防除、灌漑、收穫に關する勞働の増加が目立つ。小作者に於ては特に灌漑、收穫に關する勞働の増加が顯著である。次に勞働を従業者別に見れば農村勞働力の減少、賃銀の高騰を反映して雇傭勞働は著しく減少し、之に代つて家族勞働の増加が明らかに見られる。即ち昭和十三年に於ける稻作勞働中雇傭勞働の割合は自作者は二

一・六%小作者は一・三%であつた。然るに昨年の稲作にあつては雇傭勞働の割合は自作者に於ては一五・三%小作者に於ては一〇・五%に減じ、之に代つて家族勞働は割合に於て自作者は七八・四%から八四・七%、小作者は八八・七%から八九・五%に増加してゐる。昨年における反當勞働の増加が早魃に關係あることはもとよりであるが、他面農村勞働力の減少、賃銀の高騰の下に於て重要農産物増産運動に對する農家の協力が家族勞働の強化となつて現はれてゐることが窺知せられる。而して稲作期間を通じて賃銀は昭和十三年に比して三四・二%の高騰である。

### 一、昭和十三年 昭和十四年 稻作作業別反當勞働日數比較

種 目	昭和十三年		昭和十四年		イ、自作者
	家 族	常 雇 及 手 傳 人	家 族	常 雇 及 手 傳 人	
本年度稻作のための前年度に於ける準備作業	〇・四	〇・〇	〇・四	〇・〇	〇・七
本田荒起整地(挿秧までの一切)	〇・八	〇・〇	〇・八	〇・〇	〇・七
秧	〇・二	〇・二	〇・二	〇・二	〇・三
除草、施肥	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三	〇・三
病蟲害防除	〇・六	〇・四	〇・六	〇・四	〇・六
灌排水管理	〇・〇	〇・〇	〇・〇	〇・〇	〇・一
刈取、運搬、乾燥、乾納、拔落、乾燥	五・一	〇・四	五・一	〇・四	五・五
糶摺調製俵裝、後仕末、其他	一・八	〇・一	一・八	〇・一	二・〇
合 計	一七・一	一・四	一七・一	一・四	一九・一
畜力使役日數	一・六	一・六	一・六	一・六	一・四

種目	昭和十四年		昭和十三年	
	家 常雇及手傳人	臨時雇	家 常雇及手傳人	臨時雇
本年度稻作のための前年度に於ける準備作業	〇・四	〇・〇	〇・四	〇・〇
苗代一切	〇・七	〇・〇	〇・七	〇・〇
本田荒起整地(挿秧ま	二・八	〇・一	二・八	〇・一
挿秧)	〇・一	〇・一	〇・一	〇・一
除草、施肥	一・四	〇・二	一・四	〇・二
病蟲害防除	四・〇	〇・一	四・〇	〇・一
灌排水管理	一・〇	〇・〇	一・〇	〇・〇
刈取、運搬、乾燥、収納	五・一	〇・二	五・六	〇・三
刈取、運搬、乾燥、収納)	〇・二	〇・一	〇・二	〇・一
糶摺調製俵	一・六	〇・一	一・八	〇・一
糶摺調製俵、裝、後仕末	一・七	〇・一	一・九	〇・一
糶摺調製俵、裝、後仕末、其他	一・七	〇・一	一・九	〇・一
合計	一七・〇	〇・七	一七・〇	〇・七
畜力使役日數	一・三	一・三	一・三	一・三
昭和十三年に對し十四年の増減	〇・四	〇・七	〇・四	〇・七

一、昭和十三年 昭和十四年 稻作作業期別賃銀(臨時雇男子一日當)及畜力一日當賃借料比較

種目	昭和十四年		昭和十三年	
	本年産稻作のための前年度に於ける準備作業	本年産稻作のための前年度に於ける準備作業	本年産稻作のための前年度に於ける準備作業	本年産稻作のための前年度に於ける準備作業
本年産稻作のための前年度に於ける準備作業	一・四二	一・四二	一・〇九	一・〇九
苗代一切	一・五四	一・五四	一・一九	一・一九
本田荒起整地(挿秧ま	一・七五	一・七五	一・三六	一・三六
挿秧)	一・九〇	一・九〇	一・四四	一・四四
除草、施肥	一・六九	一・六九	一・二九	一・二九
病蟲害防除	一・六〇	一・六〇	一・二三	一・二三
灌排水管理	一・八一	一・八一	一・四八	一・四八
刈取、運搬、乾燥、収納	一・七三	一・七三	一・三〇	一・三〇
刈取、運搬、乾燥、収納)	一・六八	一・六八	一・二九	一・二九
糶摺調製俵	一・七三	一・七三	一・三〇	一・三〇
糶摺調製俵、裝、後仕末	一・六八	一・六八	一・二九	一・二九
糶摺調製俵、裝、後仕末、其他	一・七三	一・七三	一・三〇	一・三〇
合計	一七・〇	一七・〇	一七・〇	一七・〇
畜力使役日數	一・三	一・三	一・三	一・三
昭和十三年に對し十四年の増減	〇・三七	〇・三七	〇・三七	〇・三七

財團法人日本労働科學研究所の「事變下の農村流出人口に関する調査」

財團法人日本労働科學研究所農業労働調査所に於ては事變下の農村流出人口に関する調査を企て、同研究所々員内海義夫氏の手により昭和十四年七月神奈川縣中郡成瀬村に就いて之を行つた。

蓋し戦時下に於ける農村は種々の意味に於て、勞力問題の重大性に當面してゐる。その中でも、農村から

都市へ或は工業へ商業へ流出する人口の数は相當量に達してゐる。この流出人口によつて、生産力の擴充と、膨脹する工業都市の人口が支へられてゆくのであるが、流出人口の性質如何については、十分にこれを見極め、以て農業生産力を確保し、兼ねて工業労働力の新らしき編成を期しなくてはならないのである。

その調査結果の概要は次の如し  
本村の戸數四八四戸のうち半數弱即ち約四六%は職業關係による不在家族員を有してゐる。これら不在家

族員の流出密度は、小作農において大きく自作農において小であり、耕作面積の小なるものに大きく、その大なるものに小さい、といふ一般法則と大體において一致してゐる。

本村より流出したる不在家族員の九一%は農家の子弟であり、就中小作農および自作農の子弟が多い。性別には男五二%、女四八%となり、年齢的には男は二〇―二五才、女は一五―二〇才を最高とする。そして男女共に一五―二五才が大部分を占めてゐる。